

児童養護施設職員から見た入所児童の貧困経験と支援 —施設における支援と非認知的スキルに関する一考察—

岩田 美香ⁱ

児童養護施設の施設職員が、貧困を経験した入所児童に対して、どのような見立て（アセスメント）と支援を行っているのかについて、全国の児童養護施設への質問紙調査をもとに概観した。入所児童たちは、貧困だけではなく虐待や親の精神的疾患など複合的な困難を抱え、入所以前の生活は悲惨な状況であった。そうした子どもの状況を考慮して、施設職員は生活基盤である衣食住を整える支援にはじまり、個別的な対応や社会経験を広げる支援について、施設外の人々とも連携しながら展開していた。それらは、近年注目されている非認知的スキルの改善にも寄与していた。しかし調査の自由回答からは、施設職員の見立てや支援は、ある時点で備わっているスキルや能力に注目するとらえ方とは異なっていることが示唆された。施設職員は、子どもたちの生育歴を理解し、子どもたちの将来を見通した子どもの生活全体に対してアセスメントし支援していた。私たちが様々なプログラム、そして自立支援や貧困対策を講じる際には、その時点での個人の能力開発に向けた支援に注目してしまい、社会構造的な課題の改善を置き去りにしていかを問い直す必要がある。

キーワード：児童養護施設、子どもの貧困、貧困経験、支援、非認知的スキル

はじめに

本稿は、貧困を経験した児童養護施設入所児童への支援について、全国の児童養護施設調査から概観するとともに、調査で用いた非認知的スキルの枠組みと施設職員による見立てについての検討を行うことを目的とする。

子どもの貧困については、社会的関心も高まり研究も蓄積されてきている。今や子どもの貧困は、当該社会の価値観も相まって社会問題化され（中塚2019）、その支援についても、政策としての「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立し、実践レベルでも学習支援や子ども食堂を中心とした展開が

広がっている。また、貧困が親・子・孫といった世代間に渡って再生産される状況を、個人や家族の解決ではなく社会構造的に解決していくことの必要性も指摘されている（青木2003、小西2016、松本2019）。

一方、特に教育分野における格差への対応として、近年「非認知的スキル（非認知的能力・社会情動的スキル等とも言われる）」に注目が集まってきている。貧困の世代的連鎖を打ち切るためにも、教育・労働市場・社会における格差をなくす上でも、このスキルが重要な役割を果たすことは、国際的なエビデンスに基づき明らかになってきている（OECD2018）。「非認知的スキル」とは、「認知的スキル（基礎認知力、知識、応用力など）」に対して、目的達成力、協調力、苦境に立ち向かう力など、人間性に関わるスキルを指しており、幼児期における初期教育

i 法政大学現代福祉学部教授

(はたらきかけ)や家庭における養育によって育まれるとされている。

本稿で用いる調査も、非認知的スキルの獲得に有効な支援について、家庭での養育や初期教育を十分に受けることが少なかったと推測される児童養護施設の児童に対する実践を通して、明らかにするものである。調査全体の結果と非認知的スキルの枠組みによる分析は、報告書や論文(栗田・新藤・岩田2020, 新藤2020)を参照されたい。本稿では、質問紙調査の量的結果に合わせて、施設職員の声(自由回答)に注目し、上記の課題について考察していく。

1. 調査概要と回答者

(1) 調査の概要

調査は、全国の児童養護施設を対象に、主に乳幼児期に貧困状態を経験した子どもへの支援を明らかにすることを目的として実施した。そのため、回答者は次の「3つの条件を満たす子ども」を担当していた職員(各施設1名)とした。3つの条件とは、①施設入所時点で小学生であり、②施設入所期間が1年以上、そして③生活保護世帯を含む経済的困難などの貧困状態にあった家庭からの入所である。ただし、入所児童の養育家庭における影響に注目するため、乳児院からの入所事例は除いた。

調査の手続きは、全国児童養護施設協議会にあるリストに掲載されていた602施設のうち、601施設に調査票を郵送し、221票を回収した(社会的事件のあった1施設については郵送を控えた)。回収率は36.8%である。221票のうち、該当する児童がいない施設10票と欠損値の多い2票を除いた209票を今回の分析対象とした。調査実施時期は2019年3月～5月である。

調査内容は、①施設概要、②回答者の基本属性、そして③「該当する子ども」についての状況、④「該当する子ども」に対する支援、⑤施設全体の支援である。調査項目の作成においては、事前にスクールソーシャルワーカーと児童養護施設長に行った

インタビュー調査(高良2020, 福岡2020)の結果をもとに作成したが、一部の質問項目は学齢期の子どもに相応しい表現に変更している。

(2) 回答者の基本的属性

回答した職員の年齢は、「30代」が44.5%とほぼ半数を占め、次いで「20代」が25.8%と続く。「40代」は約2割いるものの、「50代以上」は少ない。性別では、男女ほぼ同数であり、勤務年数は、「6～10年」の中堅職員が37.0%と最も多く、「1～5年」が26.9%と続く。

最終学歴は「大学・大学院」が67.5%と7割弱を占め、職種は9割近くが管理職以外の現場の担当者である。また回答者の保有資格(複数回答)は、「保育士」が42.7%と半数近く、次に多いのが「教員」20.4%である。「社会福祉士」は18.4%であり、資格が「特にない」回答者も7.8%いた(表1)。

2. 入所当時の子どもたちの状況

(1) 該当する子どもの基本属性

該当する子どもの基本的属性(表2)は、性別は男子が62.2%と6割を占めた。入所時の学年は「小学1・2年生」が47.3%とほぼ半数を占めており、次いで「小学3・4年生」が34.8%、「小学5・6年生」は17.9%であった。施設の入所期間を5年で区切ると、「5年未満」が50.7%、「5年以上」が49.3%とほぼ半数ずつである。現在(調査実施時)の時点における学年は、「高校生」「中学生」が共に29.8%であり、「小5・6年生」が27.3%である。

療育手帳(知的障害)の有無では、「なし」が86.5%であったが、担当者からみた知的障害や発達障害の可能性を問うと、42.4%が「障害の可能性がある」と答えていた。

(2) 入所理由と入所前の生活

この子どもたちの入所理由(養護問題発生理由)をみると(表3)、「放任・怠惰」が33.2%と最も多

表1 回答した職員の基本属性

職員の年齢	回答数	%	
20代	54	25.8	
30代	93	44.5	
40代	40	19.1	
50代	19	9.1	
60代以上	3	1.4	
合計	209	100.0	
性別			
男性	104	49.8	
女性	105	50.2	
合計	209	100.0	
勤務年数			
1～5年	56	26.9	
6～10年	77	37.0	
11～15年	31	14.9	
16～20年	30	14.4	
21年以上	14	6.7	
合計	208	100.0	N.A.=1
最終学歴			
高校	6	2.9	
短大・専門	61	29.2	
大学・大学院	141	67.5	
その他	1	0.5	
合計	209	100.0	
職種			
施設長・管理職	25	12.1	
上記以外	182	87.9	
合計	207	100.0	N.A.=2
取得資格（複数回答）			
保育士	88	42.7	
社会福祉士	38	18.4	
精神保健福祉士	6	2.9	
心理士	9	4.4	
教員	42	20.4	
児童指導員	14	6.8	
社会福祉主事	22	10.7	
幼稚園教諭	3	1.5	
その他	3	1.5	
特になし	16	7.8	
合計	206		N.A.=3

表2 対象児童の基本属性

児童の性別	回答数	%	
男性	130	62.2	
女性	79	37.8	
合計	209	100.0	
入所時の学年			
小1・2	98	47.3	
小3・4	72	34.8	
小5・6	37	17.9	
合計	207	100.0	N.A.=2
現在の学年			
小1・2	4	2.0	
小3・4	23	11.2	
小5・6	56	27.3	
中学生	61	29.8	
高校生	61	29.8	
合計	205	100.0	N.A.=4
入所期間			
5年未満	104	50.7	
5年以上	101	49.3	
合計	205	100.0	N.A.=4
療育手帳の有無			
あり	28	13.5	
なし	180	86.5	
合計	208	100.0	N.A.=1
担当者から見た知的障害や発達障害の可能性			
ある	75	42.4	
ない	102	57.6	
合計	177	100.0	N.A.=32

く、次いで「虐待・酷使」が21.2%、「破産等の経済的理由」は16.6%であり、「父または母の精神疾患等」は16.1%であった。自由記述からは、他にも親の薬物・自殺・逮捕なども記されている。

本調査における「貧困」とは、子どもが人間らしい生活を営むにあたって必要な資源が欠如・不足している状態を指し、経済的困難を伴うことを想定しているため、入所理由の主訴に経済的理由が上がってくることは、ある意味、当然である。しかし、そ

れ以外の虐待や親の疾患といった要因が入所理由として記載されていることから、該当する子どもたちの家庭生活に、貧困を背景とした複合的な不利の重なり(松本 2013)があったことが想定される。実際、子どもたちの79.8%が虐待を経験し、なかでも(複数回答で)8割がネグレクト、3割が身体的・心理的虐待を経験している(表3)。子どもたちの入所前の生活についても悲惨な状況が記されており、以下、個人が特定されない範囲で自由記述から拾っていく。

- ミルクは与えられず水を飲まされていた。
- 親は、本児の熱が上がった時には病院に行かず、裸にして熱を下げる方法を取っていた。
- つねられたような跡や痣が紫色。
- 不衛生な生活環境で、登校すると教室に異臭が

するほど入浴や洗濯をしていなかった。

- 親戚宅やホテル、車中生活を送っていた。
- 親せきの自殺未遂を複数回撃っており、リストカットなどの処置は本児が行っていた。
- おむつをして小学校に入学。
- スーパーの試食コーナーで空腹を満たし、公園の水道で水を飲んでた。
- 兄弟がたくさんいて、上の子は下の子の面倒を見るため学校に通えていなかった。
- 10秒でパンを食べなければ3日間の食事なし。
- 親が子どもへのストレスで包丁を取り出した。
- 草やザリガニを食べていた。
- 食事はカップラーメンが多かったと話し、今でも麺への執着がみられる。
- 髪の毛は伸び、爪も学校の先生が切ってくれていた。

いずれのエピソードをみても、子どもが育ってきた環境としては、ゼロではなくマイナスの状況からスタートしている様子が描かれている。

表3 対象児童の入所理由と背景

入所理由	回答数	%	
虐待・酷使	41	21.2	
放任・怠惰	64	33.2	
父または母の精神疾患等	31	16.1	
破産等の経済的理由	32	16.6	
養育拒否	6	3.1	
父または母の行方不明	3	1.6	
児童の問題による監護困難	3	1.6	
その他	13	6.7	
合計	193	100.0	N.A. = 16
被虐待経験の有無			
あり	166	79.8	
なし	42	20.2	
合計	208	100.0	N.A. = 1
虐待経験の種類 (複数回答)			
身体的虐待	58	35.2	
性的虐待	12	7.3	
ネグレクト	132	80.0	
心理的虐待	48	29.1	
回答者数	165		N.A. = 44

(3) 入所当時の子どもたちの様子

施設職員は、該当する子どもについて、どのように把握していたのであろうか。入所時の「子どもの様子」について(表4)、「(まったく+ほとんど)できていない」の割合が5割以上である項目を使って子どもの様子を描いてみると、「馬鹿にされたり悪口を言われた時も、うまく対処することができず(77.4%)」「必要な時にもアドバイスを求めることができず(67.2%)」「将来のために、今は、諦めたり嫌なことでも実行することは難しく(66.0%)」「将来について明るい面を言うことができず(64.9%)」「自分のベストを尽くそうとすることは難しい(62.6%)」となる。

同様に、入所時に不足していると思われる「力」についても(表5)、「問題解決」「自分を表現する」「感情をコントロールする」「将来を見通す」「自分を信じる」「継続する」「関係をつくる」「挑戦する」といった「力」について、半数以上が不足している

表4 子どもの様子：入所時と現在の変化

単位（%）

「できていない（まったく+ほとんど）」という回答の上位順	入所時	現在	入所時-現在
馬鹿にされたり、悪口を言われてもうまく対処すること	77.4	27.2	50.2
必要な時には適切にアドバイスを求めること	67.2	15.4	51.8
将来のために、今ほしいものをあきらめたり、嫌なことでも実行すること	66.0	21.3	44.7
将来について明るいことを言うこと	64.9	14.0	50.9
自分のベストを尽くそうとすること	62.6	19.3	43.3
大人が指示しなくても、自ら学校の準備・宿題・手伝いなどをすること	48.3	14.5	33.8
自分がわからなかったことを知るために、質問すること	45.7	10.2	35.5
他人にきちんとあいさつすること	33.1	9.6	23.5

表5 子どもたちに不足している「力」（複数回答）：入所時と現在の変化

単位（%）

子どもたちに不足している力	入所時	現在	入所時-現在
問題解決力	68.0	53.7	14.3
自分を表現する力	63.6	36.6	27.0
感情をコントロールする力	60.2	39.5	20.7
将来を見通す力	59.7	58.5	1.2
自分を信じる力	56.8	32.7	24.1
継続する力	55.3	44.9	10.4
関係をつくる力	54.4	31.2	23.2
挑戦する力	54.4	37.1	17.3
自分を知る力	45.6	25.4	20.2
他者を頼る力	44.2	25.4	18.8
立ち直る力	38.3	20.0	18.3
その他	3.9	2.0	1.9

と回答しており、施設職員は質問として設定した大部分の力が育っていないと見ていた。さらに自由記述からは、「金銭感覚」「人の話を聞く力」「モノを管理する力」「衛生面・片付け」といった、より具体的な内容について不足していると記されていた。

3. 子どもへの支援と成果

(1) 「力」を高めるための支援

こうした子どもたちに対して、施設はどのような

支援を提供してきたのだろうか。子どもたちの成長には、施設における支援に加えて、子どもたち自身の発達、友人や教員・学校をはじめとした施設以外の人や集団の影響もありうる。しかし、子どもたちの生活基盤となる児童養護施設での影響は大きいと思われる。以下、職員自身が自分たちの支援の中でも、子どもの力を高めるために寄与したと考えている支援についてみていく。

質問項目としては、「入所していた頃に不足していた力を高めるための支援」として10項目を設定した。その中で、「衣食住を提供する（79.4%）」「学校の教員と連携をする（78.4%）」「1対1でサポートをする（73.0%）」「多様な機会を提供する（63.7%）」「子どもの強みを伝える（52.5%）」支援が、子どもの力を高めるために行った支援として（複数回答で）上位5位を占めていた（表6）。

これらの支援をまとめると、「衣食住の提供」は、施設入所以前の子どもたちがおかれていた環境を考慮すると、様々な支援の基礎として必須の支援であり、また回答者の4割強が保育士の資格もっていることも関連していると思われる。そうした生活基盤の上に、「学校の教員と連携する」ことや「多様な機会を提供」するといった、子どもたちの生活世界を広げる支援によって社会性を育てている。また、これらの支援と並行して「1対1でのサポート」や「子どもの強みを伝える」といった、個々の子どもに寄り添い、子どもの内面に働きかけていく支援も

表6 子どもの力を高めるために行った支援（M.A.）

	回答数	%
①衣食住を提供する	162	79.4
②1対1でサポートする	149	73.0
③子どもの強みを伝える	107	52.5
④学校の教員と連携する	160	78.4
⑤多様な経験ができる機会を提供する	130	63.7
⑥地域活動を参加を促す	85	41.7
⑦同世代の交流を促す	82	40.2
⑧多様な大人との交流を促す	70	34.3
⑨お手本となるような人々との交流を促す	37	18.1
⑩保護者をサポートする	87	42.6
⑪その他	21	10.3
回答者数	204	

N.A.=5

重層的に展開されている。

以下、それぞれの支援について、自由記述を用いて具体的にみていく。

①衣食住を提供する

いずれの回答も入所時の子どもたちのマイナスの状況を埋めるべく衣食住を整える支援を行っているが、次の「②1対1のサポート」にも通じるような、対象児童一人ひとりの状態に応じた工夫のもと、衣食住を提供していた。

- 朝昼夕の食事を食べること。夜は布団に入って眠るなど、生活する上で当たり前のことを提供した。
- 一緒にごはんを作って、食べたり、洋服やシーツなど新しいものをそろえたりする。その際、本児自身で選ぶようにする。
- 食事について、食べる経験（野菜・魚）が少なかつたため、食べやすいよう苦手にならないよう工夫して提供し、経験を増やした。
- 朝食を食べる習慣がなかった為、まずは朝食をしっかりと食べるように支援した。

- その時その場に合った服選びを一緒に行いました。食事がかきこむように食べていた為、ゆっくり進めるよう声掛けをしていました。部屋の片付けも一緒に行いました。
- 安心出来る環境作り。シーツ替えを一緒に行ったり、就寝時には毎日、本の読み聞かせを行った。食事については温かい物の提供。月1回はクッキングを行った。
- 作りたての食事の提供。自分が選んだ食器等の提供。自分の好みに応じた衣類、寝具の提供。洗濯物をていねいにたたむ工夫。手作りのおやつ作り。
- 楽しい食事の雰囲気づくり。
- 食事マナーや歯磨きの習慣、洋服の着方が崩れていても気にしないなど、生活全般的なスキルが身につけていないため、一つひとつのやり方など教えていくと同時に身なりなどきれいにすることや、職員が子どもの歯を磨いてあげたりして、心地よいと感じてもらえるように工夫した。

- 一緒に入浴し、頭の洗い方を教えた。

②1対1でサポートをする

子どもの想いを聞き、職員からの話も伝わるように、といった個別のコミュニケーションから関係性をつくり、また、そのための時間や機会を設けていた。さらに他児とのトラブルへの対応や、学習支援、発達の課題に対する対応についても記されていた。

- 何かあった時は特に、本児が話せるまで待ち、思いを聞く。
- 寝かしつけの時間を大切に、その日の出来事について話をしたり、読み聞かせを行い、信頼関係の構築と情緒面の安定につとめた。
- 学習する習慣が身につけていなかった為、職員が1対1で学習支援を行った。
- 大人に対しての不安感が強く、暴言が激しく、一つひとつの物事に対して1対1でじっくり関わった。
- 信頼関係、愛着の形成、情緒の安定ができるよ

うに、1日に少しの時間でも話をしたり遊んだり関わった。

- ・他児とトラブルを起こすことが多かったので、仲裁、ふりかえりなど。経験が少なかったため、色々なところへの外出など。
- ・同年代の子に比べると能力が低く、理解できないことが多かったため、本児にとって分かりやすい表現をし、振り返りの機会を多く設けた。
- ・担当職員を配置して、一緒に個別で外出をしたりして関わりを持つ。児童の発達障害段階に応じたサポートをする。
- ・心理士と話す機会を多く持った。
- ・スペシャルタイムとして、職員と子ども1対1で話をしたり遊ぶ時間を設け、職員との関係構築を行った。

③子どもの強みを伝える

子どもの良い所について具体的に伝えていく支援が、多様な方法とともに記されていた。そのためには、子どもの様子をよく見ていることが必要であり、時に職員も子どもの興味関心のある事に参画して、子どもの良いところを伝える支援を行っていた。

- ・児童の得意な事や、長所を本児に伝えていく。生活場面で気づいた時や、1対1の場面などで伝える。
- ・子ども自身やりたいことを積極的に取り組めるようにし、できたことをほめる。
- ・本児の入所前の様子も含め肯定する。ほめるということで自信がつけられるように支援した。
- ・細かい事でも、職員から児童へお礼をしっかりと意識を持った。お礼によって行動が強化されることもあった。
- ・うまくできていることだけでなく、同時に「失敗してもいい」、「まちがえてもいい」という事を伝える。
- ・苦手なことに取り組む際は、本児の良い面を伝えてから促すよう意識していた。
- ・「足が遅いから」「弱いから」と逃げてばかりだったので、自信を持てるように声掛けをしたり、

職員も一緒に参加した。

- ・本人が興味を持っていることを一緒に興味を持つようにしながら褒めたり、自己肯定感を高めていけるように働きかける。
- ・良いこと・できたことノートを寝かしつけ時に記入。
- ・職員で認めるポイントを共有し実施。

④学校の教員と連携する

スクールカウンセラーなども含め学校の教員と頻繁に連絡をとり、子どもについての状況や支援について情報共有している支援が記されていた。また、学校側も様々な形で施設と協働していた。

- ・毎日の送迎や授業参観を通して、学校での様子を把握し、連絡帳や教育相談を通じて細かなことまで話し合い連携している。
- ・小・中支援学校の先生と、それぞれ年に1回ずつ懇親会を設け、その日は家庭訪問をして、子どもの生活場面も直接みてもらった。
- ・朝学習や自主学習の状況、また学校での友人のつくり方の様子を聞き、取り組みの姿勢や相手の気持ちの汲み方を練習。
- ・子どもの能力に合わせて宿題の量を調整してもらい、投げ出さずに挑戦する力と継続する力を促した。
- ・担任、スクールカウンセラーとの情報交換会の実施。本人の状況に応じて登校刺激を控えることを共通理解。
- ・先生とアセスメント会議を行う。
- ・週1の学習会（小学校教諭が来園）。
- ・学校でのトラブルが多かったので、毎日学校を訪問した。
- ・前小学校との連携、現小学校との情報の共有を行う。
- ・転校時に児童相談所と三者にてケース会議。

⑤多様な経験ができる機会を提供する

前述の「①衣食住の支援」や「②1対1のサポート」とも重なる支援が見られた。すなわち、子どもたちが経験してこなかった日常生活や、施設以外で

の非日常の体験を促し、時に職員が一緒に行うことで参加しやすいように支援していた。

- 一緒に食事を作りながら食材や器具の名前を覚えたり、また一緒に外出することで、外部の方への挨拶や公共マナーを身につけさせた。
- 本児の興味、関心を肯定的に受け止め、施設内行事や招待行事等に一緒に楽しく参加する。
- 地域行事や子ども会、施設合同での球技大会で、同世代や大人との関わりができる場に参加させ、人間関係を構築できる環境をつくった。
- ボランティアさんの来寮により、ダンス教室、バルーン教室などの機会を増やしている。
- カラオケ、スケート等、子どものリクエストや職員として経験してほしい活動をユニットの小旅行として月に一回程度取り入れる。
- 施設の行事など積極的に参加できるよう促す。また、職員の趣味のドラムなど、本児が興味をもったことを教えて一緒にする。
- レクレーションの実施、地域の行事への参加、本人が興味のあるセミナーへの参加、学習ボランティアと勉強会の実施など、本人の関心に合わせて、経験、体験の機会を提供した。
- 川やキャンプにも行き、生活場面では得られない体験の提供。
- 季節を感じられるような行事を企画し、本児も参加していた。バス旅行で色々な場所を訪れる。スポーツ、百人一首などの大会に向けて練習した。
- 寮の行事とは別に、星空観察やホテルを見せに行ったりと、職員が個別に連れて行ったりしている。

この他、「⑥地域活動への参加」「⑦同世代の交流」「⑧多様な大人との交流」「⑨手本となる人との交流」に関する支援についても、上述と同様に、子どもの生活世界や経験を広げるために、施設外の人々の助けも借りながら、施設として、また職員個人として支援を提供していた。

⑥地域活動への参加を促す

- 施設全体で地域活動に参加したり、施設行事に地域の方々を招待することで、地域との交流を大切にしている。
- 児童館でのイベントや地域の防災訓練などへの参加を促し、地域と関わる機会を増やし、地域の一員である自覚を促した。
- 1年間で数回ではあるが、地域のおまつりや、子ども会の行事などに参加させてもらい、地域の方との関りや理解が少しでも増えるようにした。

⑦同世代の交流を促す

- コミュニケーションに難があったため、SST（ソーシャルスキルトレーニング）も行いながら、できるだけ他児童との交流を促していました。
- ホームにて学校の友人を呼び、一緒に遊ぶ中で、コミュニケーション方略を伝えた。
- 友人と遊ぶ機会が持てるよう、施設も集いの場として提供する。

⑧多様な大人との交流を促す

- 施設職員をはじめ、サッカークラブの保護者、コーチ等、様々な大人とかかわり、声を掛けてもらうことで、皆が子どものことを気にかけていることが伝わるよう支援した。
- 施設職員はもちろんのこと、学習ボランティア、学校関係、児童館、インターン等セミナーで、多様な大人と関わる機会を提供している。
- フレンドホームの活用

⑨お手本となるような人々との交流を促す

- 大学生の学習ボランティアとの交流
- 地域の方々との交流や卒園生もそうですが、職員の姿を徹底して見せる支援も行っていました。
- 1番の手本は、入所児の高年齢児だった。

⑩保護者をサポートする

当該児童と親との関係や、子どもの入所理由によって様々であるが、親子の関係を維持・修復するための保護者支援を行っていた。一方、「交流制限が

ある」ために保護者へのサポートを行わない場合や、「親からは連絡が一切なかった」「ルールを守った交流ができるよう、その都度指導支援した」というように、親支援への困難さも記されていた。

- 保護者の現状を確認しながら、必要な手続きや面会の調整を実施、家庭復帰に向けて支援した。
- 保護者会等の園の行事へおさそい。
- 児童の生活の様子を伝えながら（良い所）、関わりが途切れないように努めた。
- 交流の送迎をした。
- 入所してからの子どもの状況を親に報告し、定期的に面会に来てもらうように努めた。親からは連絡が一切なかったため、こちらからの働きかけが必要だった。
- 定期的に家庭訪問を行い、現状把握に努め、支援する。
- FSW（ファミリーソーシャルワーカー）を中心に、母の本児に対する心配事を積極的に解消することに努めた。
- 親が精神疾患を患っていたため、病院や地域の民生委員など、関係機関と連携した。
- 現状は、子ども家庭センターの職員にお願いしている。
- 生活保護などで、福祉センターの担当者とも連携する。

⑪ その他

設定した支援項目以外に列挙された支援としては、権利擁護、アンガーマネジメント、性教育、ライフストーリーワークといった、より専門的な内容が記されていた。

- 権利擁護、自立支援
- 親が聴覚障害者のため、本児が手話を覚えられるように職員と取り組んだ。
- 怒りの気持ちが出てきた時に、部屋や園周辺でクールダウンすることを本児と話し合っただけ、本児が実際に行えた際は、ほめている。
- ひらがながあまり読めなかった（1年生のときの学習が抜けていたため）ので、部屋にひらが

な表を貼り、夜に学習の取り組みをした。

- 性教育。小学生は年6回。中学生は年5回職員性の性教育委員を中心に児童相談所の勉強会を実施。
- ライフストーリーワーク。センターと連携し、子ども自身の生い立ちや施設で暮らす理由を整理する。
- スポーツを通じて、自己肯定感、自信をつけさせ、自分を省みる支援をする（協調性、社会性の習得）。

(2) 子どもたちの変化と支援の効果

子どもたちは、こうした支援を得て、どのように変化したのだろうか。入所時と現在（調査実施時）の変化（表4）を見ると、「子どもの様子」については、「馬鹿にされたり悪口を言われた時も、うまく対処することができない」は77.4%→27.2%へ、「必要な時にもアドバイスを求めることができない」は67.2%→15.4%へ、「将来のために、今は、諦めたり嫌なことでも実行することが難しい」は66.0%→21.3%へ、「将来について明るい面を言うことができない」は64.9%→14.0%へ、「自分のベストを尽くそうとすることが難しい」は62.6%→19.3%と、いずれの項目においても「できない」という回答は各段に減っており、子どもたちの様子の改善がみられる。

不足していると思われた「力」についても（表5）、11項目すべての項目について改善している。とりわけ「自分を表現する（63.6%→36.6%）」「自分を信じる（56.8%→32.7%）」「関係をつくる（54.4%→31.2%）」「感情をコントロールする（60.2%→39.5%）」「自分を知る（45.6%→25.4%）」といった力が、「入所時-現在」の差が2割を超えており、より「力」が身につけてきていると評価されている。

このように、貧困を経験した入所児童に対する「力」を育て「様子」を改善していくことに、施設職員による支援は良好な結果を出している。もちろん、ひとつの支援が子どもたちのひとつの成長や能力の向上に対応しているものではないが、衣食住という

生活が安定したうえで、子どもたちは「自分を知り」「自分を信じる」ことができ、さらに「自分を表現」し「将来についての明るい・肯定的な発言」も出てくるのであろう。また、自らのネットワークが広がり、様々な機会が提供される中で、他者との「関係をつくる」力も培われ、苦手な状況下においても「うまく対処することができる」ようになり、他者への「アドバイスを求めることができる」ようにもなっていく。さらに個別的な援助や肯定的な働きかけの中で、自らの「感情をコントロール」し、「将来のために、今、嫌なことでもやる」といった行動もできるようになっていく。その結果、「自分のベストを尽くそうとする」といった、より積極的な姿勢も生まれてくると思われる。

ただし自由記述には、「現在の方が評価が下がるところもありましたが、成長段階で思春期となったためであり、とても良いことであると感じるところもありました」とあるように、調査項目として設定された「様子」や「力」が高まったことが、必ずしも子どもの成長とイコールというわけではない。

4. 施設支援の再検討

(1) 不足している？力

再び表4・5から、現在においても子どもの様子や力について、「不足している・できていない」と評価された項目について注目してみたい。子どもの様子については、「馬鹿にされたり悪口を言われてもうまく対処する (27.2%)」「将来のために、今は嫌な事でも実行する (21.3%)」「自分のベストを尽くそうとする (19.3%)」が未だ「できていない」と回答している。いずれの項目も、入所時との差でみた時の改善率は4～5割と高く、入所した時から比べるとかなり改善されているが、それでも依然として2割程度はできていない項目と言える。同様に子どもの力については、「将来を見通す力 (58.5%)」「問題解決力 (53.7%)」「継続する力 (44.9%)」「感情をコントロールする力 (39.5%)」「挑戦する力

(37.1%)」「自分を表現する力 (36.6%)」について、4～6割程度が現在も不足していると評価している。

この結果をどのように考えたらよいのだろうか。特に「力」において、子どもたちに備っていないと回答する割合が高くなっている。その中身を見ると、例えば「将来を見通す力」は、今後、特に施設退所後の生活が見通せない中で将来を見通す力を問うことは酷であろうし、条件が整わない中で「挑戦する力」や「継続する力」も開花しようがないであろう。実際、他の設問で、子どもの進学希望を聞いているが、「高校 (50.7%)」や「短大・専門学校 (14.0%)」が希望先としてあげられているのと同時に、「わからない」という回答も21.7%と高い。さらに、この進路希望に向けて心配な事としては、「学力 (33.2%)」と「金銭的負担 (26.7)」で半数を超えている。こうした子どもを取りまく諸条件が不確定なままで、将来を見通し受験などに挑戦する力を育てようとしても限界がある。

さらに「感情をコントロールする力」についても、13.5%が療育手帳を取得し、療育手帳は取得していても知的障害や発達障害の可能性があるとされる子が42.4%いる(表2)ことから、そうした子どもの発達上の課題も関与している可能性がある。

(2) できていない支援

では、子どもたちに育っていない(とされる)「力」や「様子」を伸ばしていくために、施設はどんな支援を展開していけばよいのだろうか。「現在行っている支援」についてたずねると(表7)、「子どもとよく会話をする」といった事は「よくする+する」で9割を超えている。しかし、「子どもと十分な時間を過ごす」事については、「過ごしている」が66.0%と高い一方で、「あまり過ごしていない (21.1%) + 過ごしていない (1.9%)」で2割を超えている。同様のことは具体的な他の項目でも見られ、「勉強をみている」では、「ほぼ毎日 (27.1%)」と「めったにみることはない (31.0%)」とが、それぞれ高い値を示し回答が分散傾向にある。さらに、

「一緒に外で遊ぶ」ことが「めったにない（33.8%）」、「一緒に外出する」ことも「めったにない（27.8%）」、そして「一緒に料理する」ことも「めったにない（56.1%）」であり、いずれも、入所時に個性の高い様々な手厚い支援を行っていたのと比べると支援が後退している印象を受ける。

しかしこれは子どもと職員の関係性の悪さによるものではない。現在の子どもの学年を見ると（表2）、高校生が29.8%、中学生が29.8%であり、しかも男子が6割を超えていることから、子どもの方が職員と一緒に行動をとることを恥ずかしがり避けているのかもしれない。また「勉強をみる」ことについても、高校生の勉強を施設職員が教えることの難しさもあり得る。それらを裏付けるように、現在の子どもとの人間関係（表8）では、「ユニットの職員」や「学校の先生」との関係は9割以上が「とても＋まあまあ」良い関係であると回答している。この値は、施設ユニットや学校における同年齢の子どもよりも、保護者との関係よりも「良い」関係であり、これまで見てきたように、施設職員や学校の先生が連携して子どもへの支援や教育を行ってきた結果である。さらに、該当する子どもたちが成長し年齢が高くなっていくのと同時に、施設には新たな児童が次々と入ってきて、その子どもたちの多くも貧困や虐待という過酷な生育歴を背負っているために、より幼い子どもたちへの支援に時間も取られるのであろう。施設職員の職務における多忙さや余裕のなさによって、年齢が大きくなってきた子どもたちとは会話が中心となり、何かを一緒にするといった時間を捻出する事が難しくなっていることも考えられる。

（3）貧困を経験した子どもへの支援と施設の支援

「該当する子ども」だけに限らず、「施設全体として」行っている支援についてもたずねているが、その内容をみても、これまで見てきた「力」を高めるための支援と同様の支援が提供されている。回答した施設の9割以上が行っている支援を拾っていくと、「生活基盤を整える支援」として、新しい洋服・靴

表7 現在行っている支援

よく会話をするか	N = 209
よくする	48.3
する	47.8
あまりしない	3.8
合計	100.0
十分時間を過ごしているか	N = 209
よく過ごしている	11.0
過ごしている	66.0
あまり過ごしていない	21.1
過ごしていない	1.9
合計	100.0
勉強をみている	N = 203
ほぼ毎日	27.1
週に3～4回	14.3
週に1～2回	14.8
月に1～2回	12.8
めったにない	31.0
合計	100.0
一緒に外で遊ぶ	N = 204
ほぼ毎日	7.4
週に3～4回	6.9
週に1～2回	23.0
月に1～2回	28.9
めったにない	33.8
合計	100.0
一緒に施設内で遊ぶ	N = 204
ほぼ毎日	11.3
週に3～4回	21.1
週に1～2回	27.9
月に1～2回	20.1
めったにない	19.6
合計	100.0
一緒に料理する	N = 205
ほぼ毎日	2.0
週に3～4回	2.4
週に1～2回	13.7
月に1～2回	25.9
めったにない	56.1
合計	100.0
一緒に外出する	N = 205
ほぼ毎日	1.0
週に3～4回	1.0
週に1～2回	13.7
月に1～2回	56.6
めったにない	27.8
合計	100.0

表8 現在の当該児童の人間関係

ユニットの職員との関係	N=208
とても良い	24.0
まあまあ良い	69.7
あまり良くない	4.8
悪い	1.4
合計	100.0
ユニットの子どもとの関係	N=207
とても良い	9.2
まあまあ良い	75.8
あまり良くない	14.0
悪い	1.0
合計	100.0
学校の先生との関係	N=204
とても良い	19.1
まあまあ良い	72.1
あまり良くない	8.3
悪い	0.5
合計	100.0
学校の友人・クラスメイトとの関係	N=205
とても良い	17.1
まあまあ良い	64.9
あまり良くない	17.1
悪い	1.0
合計	100.0
保護者との関係	N=205
とても良い	14.1
まあまあ良い	56.1
あまり良くない	19.5
悪い	10.2
合計	100.0

の購入や、通院・看病といった医療的なケア、年齢に応じたお小遣い、整理整頓、洗濯物のたたみ、繕い物などを行い、「個性性を尊重した支援」としては、言葉かけやスキンシップ、1人ずつの誕生日、個人アルバムの作成、食事のメニュー決めなどがあげられる。また「社会性を育む支援」としては、旅

行やキャンプ、クリスマスやお正月のプレゼント、みんなで集まったのおしゃべり、そして学校とのより良い連携をもつために学校行事へ職員が参加することなどが行われている。さらに「社会的養護における支援」として特徴的であるが、退所後の生活スキルを身につけることも行われていた。

施設における貧困を経験した子どもたちへの支援は、特別な支援が展開されているというよりは、日々の生活を整える、建築に例えると基礎工事にかなりの時間とエネルギーを使っていた。もちろん、深刻な生育環境によって受けた心や身体へのダメージなどに対する心理的・医療的ケアも必要である。しかし施設職員は、貧困や虐待を経験して入所している子どもたちの日常を取り戻すことが、いかに大切であるかを知っており、だからこそ日常がマイナスからスタートしている子どもたちに対しての心身ともに健康な生活を支援することに重きを置いた回答が多かったのであろう。そうであれば、そのていねいな支援をいかに担保していくのか、そのための子どもたちの支援に携わっている職員と児童養護施設を取り巻く諸条件を整えていくことが、いっそう求められる。

(4) 生活支援と非認知的スキル

ここで再び、子どもたちの力について、今度は反対に「子どもたちに備わっている力」として回答されたものに注目してみる。それは「立ち直る力」であり、入所時で38.3%、現在でも20.0%と、「不足している」という指摘が最も少なかった(表5)。施設職員は、それが無意識であったとしても、子どもたちが育っていく芽や芯のようなものを抱えていることを感じ取っており、その芽としての「立ち直る力」が育っていくように、環境としての生活を支援していた。少なくとも、ある不足している特定の「力」や「能力」を育て上げるための支援という考え方ではない。実際、子どもたちの「不足している力」をたずねたことに対する自由記述からも、「不足していることや心配事などに関しては、総合的な

課題として、実際は一つに絞らざるを得ないという事は難しいです」と記されていた。

さらに、子どもの力が向上するために必要な支援について、前述や表6の①～⑩といったカテゴリーに分けず、自由記述による回答も得ている。そこでは以下のような記述がみられた。

- 自分が大切な存在だと感じられるように、身近な大人に可愛がられ大切に思われ、扱われること
- その子自身を受け止め受容し、大切な存在であることを伝え続けること、喜怒哀楽どの表現をしても、あなたが好きだと伝え、同じ感情を共有してあげることが1番大切だと思っています。
- 子どもを信じること
- 大人を信用してもらうこと
- 生い立ちの理解
- その子の能力、性格、バックグラウンドに応じて、必要と思われる支援を意図をもって、具体的にを行うこと。
- 見立てとアプローチ（支援方針）
- 安心できる、認められる環境・関係
- 日常支援の積み重ね
- 不足している部分をマイナス的なとらえ方をし、修正や改善を図るような支援はしない。

これらの回答はいずれも、特に最後の回答が示しているように、「不足している」といったマイナスの要因について改善を図るようなとらえ方ではない。支援方法としては抽象的であるが、子どもを信じ、大人を信用してもらって、彼らの生い立ちも含めたその子自身を受けとめ、その上での見立てと日常の支援の積み重ねが必要であると回答している。

自分で行った調査を否定するようなこととなるが、子どもについて「非認知スキル」の枠組みを使って考えていく事のメリットとデメリットについては、慎重であることが必要となる。非認知的スキルは、学習指導要領における「生きる力」の中の「学びに向かう力、人間力」に相当するとされており（中山2018）、従来の知識や技能偏重型の学びを見直し、

就学前教育の重要性と効率性について評価されている（ヘックマン2015、タフ2017）。しかしそれが、伸ばすべき力やスキルとして意識されたこととたん、その使われ方も対象も変わってきて、我が子の才能を伸ばしていくための「教育」の一部になってしまっている現状もある（ポーク2018、東洋経済2015）。

このことは、社会的養護における「自立」に向けた様々なプログラムをつくる動きに対しても言えるのではあるまいか。子どもたちへの支援が、より科学的なエビデンスに基づき体系化されたものとなっていく事は望ましいことである。また自立を支援することは悪いことではない。しかし児童養護施設長へのヒアリング（福間2020）においても、「職員が自立支援に力を入れるって文化がどうしても根深く基盤として確立されている」とあるように、自立ありきで支援が展開されている。何のための・どこへ向かっている支援なのか、自立のための個人の能力やスキルを身に着けさせるという考え方についても、立ち止まって考える必要がある。

貧困対策や貧困への支援においても、個人の力を高めていくことは否定しないが、社会構造的課題や条件の改善よりも、貧困にある個人の能力開発に特化していく支援になっていないのかの問い直しは重要であろう。今回の調査における施設職員の声を通して、改めてそのことに気づかされた。

おわりに

本稿では、児童養護施設職員に対する質問紙調査を用いて、貧困を経験して入所してきた児童への支援についての検討を行った。子どもたちの生活基盤を整え、個別の対応や社会経験を豊かにしていく支援は、子どもの貧困研究でも注目されてきている「非認知的スキル」や子どもたちに備わっていない「力」を伸ばしていく事に寄与していた。一方、職員の自由記述における見立て（アセスメント）では、子どもたちの身に付けさせるスキルや力といったとらえ方とは異なっていた。すなわち、子どもたちの

過酷な生育歴や将来の生活を考えていく上で、彼らを取りまく諸条件にも目配せをした総合的なアセスメントと支援を提供していた。

支援に対する評価を行うためには、一定の評価軸や評価の基準が求められ、それによるエビデンスを積み上げていくことは大切なことである。しかし動もすれば、その評価軸や基準だけが独り歩きして、個人のスキルや力、能力といったものを高めることに終始してしまい、彼らのおかれている社会的な要因に目をそらすことになってしまう。たとえ子どもたちに備わっていない能力やスキルがあったとしても、彼らが生きやすいような、再チャレンジできるような社会の体制づくりを高めていくという考え方も必要であろう。

こうした傾向は、社会福祉領域における「自立」支援や、子どもの貧困対策としての学習支援などにおいてもあり得る。子どもたち一人ひとりのニーズは子どもたちが社会構造的な課題のために直面している困難さであり、子どもだけではなく社会的な課題に対しても取り組みが必要であるという、古くて新しい問題について自覚的であることが、改めて求められている。

なお本稿は、2017年度から2019年度の文部科学研究費補助による調査研究「子どもの貧困と学習の社会的成果に関する理論的実証的研究」(基盤研究A17H01023)における研究成果の一部である。本調査にご協力いただいた全国児童養護施設の職員のみなさまに、心から感謝したい。

文献

- 青木紀「現代の世代的再生産の視点」青木紀編『現代社会の「見えない」貧困—生活保護母子世帯の現実』(明石書店, 2003年) 11-29頁
- 福間麻紀「貧困状態にある子どもの非認知的スキルと支援—児童養護施設長調査から—」笹井宏益編『子どもの貧困と学習の社会的成果に関する理論的実証的研究報告書』(玉川大学学術研究所, 2020年 印刷中)
- ヘックマン, ジェームズ・J『幼児の教育の経済学』大竹文雄解説・古草秀子訳(東洋経済新報社, 2015年)
- 小西祐馬「乳幼児期の貧困と保育—保育所の可能性を考える」秋田喜代美・小西祐馬・菅原ますみ編『貧困と保育』(かもがわ出版, 2016年) 25-52頁
- 高良麻子「貧困状態にある子どもに不足している非認知的スキルと支援—スクールソーシャルワーカーへ調査から—」笹井宏益編『子どもの貧困と学習の社会的成果に関する理論的実証的研究報告書』(玉川大学学術研究所, 2020年 印刷中)
- 栗田克実・新藤こずえ・岩田美香「貧困を経験した子どもへの支援に関する調査報告—児童養護施設全国調査—」笹井宏益編『子どもの貧困と学習の社会的成果に関する理論的実証的研究報告書』(玉川大学学術研究所, 2020年 印刷中)
- 松本伊智朗編『子ども虐待と家族「重なり合う不利」と社会的支援』(明石書店, 2013年)
- 松本伊智朗「なぜ、どのように、子どもの貧困を問題にするのか」松本伊智朗・湯澤直美編『シリーズ子どもの貧困 生まれ、育つ基盤 子どもの貧困と家族・社会』(明石書店, 2019年) 19-62頁
- 中塚久美子「子どもの貧困をめぐる報道と社会意識」松本伊智朗・湯澤直美編『シリーズ子どもの貧困 生まれ、育つ基盤 子どもの貧困と家族・社会』(明石書店, 2019年) 283-307頁
- 中山芳一『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』(東京書籍, 2018年)
- OECD(経済協力開発機構)編, ベネッセ教育総合研究所企画・制作『社会情動的スキル—学びに向かう力』(明石書店, 2018年)
- ポーク重子『「非認知能力」の育て方—心の強い幸せな子になる0~10歳の家庭教育』(小学館, 2018年)
- 新藤こずえ「児童養護施設における貧困経験のある子どもの非認知スキルと支援」(『上智大学社会福祉研究』44, 2020年) 17-40頁
- (週刊)東洋経済 2015-10-24『『教育』の経済学』50-85頁
- タフ, ポール『私たちは子どもに何ができるのか 非認知能力を育み、格差に挑む』高山真由美訳(英治出版, 2017年)

A Study of the Assessment and Support for Children Experiencing Poverty : From the Standpoint of Workers in Residential Children's Homes

IWATA Mikaⁱ

Abstract : The purpose of this research is to explore the assessment and support provided by social workers and childcare workers in residential children's homes. What kind of support is available to develop the non-cognitive skills (the socio emotional skills) in children who are experiencing poverty? We used a questionnaire to survey social workers and childcare workers in residential children's homes to learn more about the situation of these children. The results indicated that most of these children have experienced neglect, child abuse, parental mental disease, and a miserable quality of life. In response to the tragic experiences these children have encountered in their early developmental history, residential children's homes offer support in the form of "food and clothing," "one-to-one attention," and "experiencing a variety of things." The quantitative data of this survey provides evidence that these forms of support have helped children develop their non-cognitive skills. However, the results of an open-ended comments question tell a different story. From these comments, we discover that these workers, when assessing the children they serve, do not prioritize deficits in non-cognitive skills as the issues most worthy of addressing. Instead, these social workers and care workers gave their attention to the children's whole life including their early developmental history and their future opportunities and challenges. When we envision and enact support programs to nourish self-reliance of our target populations, or consider avenues by which to provide support for the socially vulnerable, we have a natural tendency to focus on developing the capacities of individual clients. But perhaps this natural tendency needs to be questioned and revisited. Perhaps we need to re-examine challenges that these children face arising from social structures, with a mind to discovering new avenues for addressing the needs of these children, whose lives have begun under such difficult circumstances.

Keywords : Residential children's home, Child poverty, Assessment, Support, Non-cognitive skills (Socio-emotional skills)

i Professor, Faculty of Social Policy and Administration, Hosei University